

掛川市向山古墳（第1号）

発掘調査概報

— 東名高速道路建設に伴う発掘調査 —

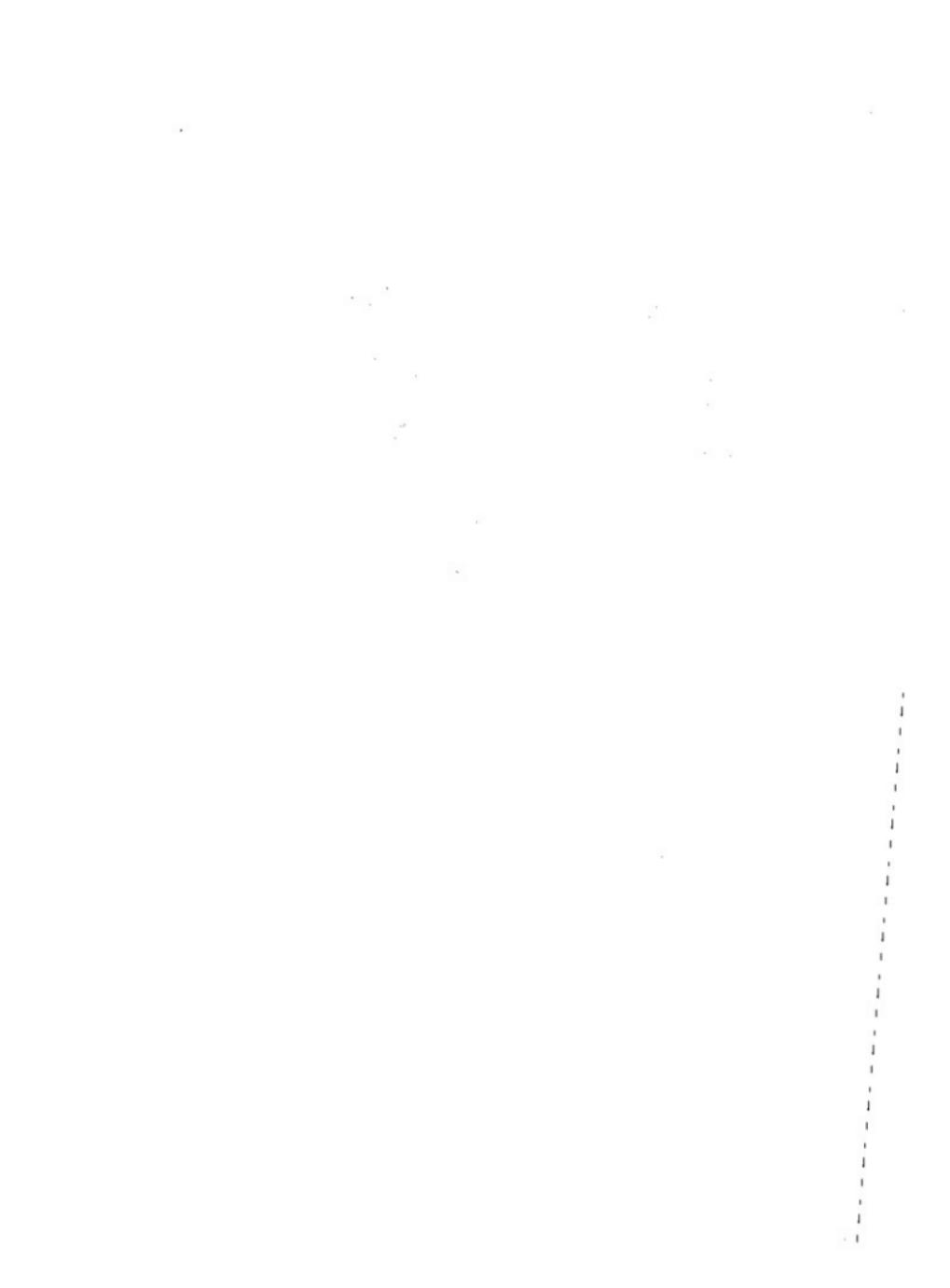
1967

掛川市教育委員会

掛川市向山古墳（第1号）

発掘調査概報

— 東名高速道路建設に伴う発掘調査 —



掛川市向山古墳(第1号)

発掘調査概報

—東名高速道路建設に伴う発掘調査—

1. 所在地 掛川市岡津字向山325番地
2. 調査期間 昭和42年7月22日～昭和42年7月31日
3. 調査主体 日本道路公団
4. 調査者 静岡県教育委員会・掛川市教育委員会
5. 発掘担当者 大谷 純仁(執筆者・同左)
6. 参加者 尾藤 聰・増井 義昭・後藤 武蔵・松浦 哲二・鳴 竹秋・大崎 長夫・宮本 豊彦・外山 和夫・山下 晃・池田 純・掛川西高校
掛川東高校・中遠工業高校・袋井商業高校・磐田商業高校・横須賀高校
浜松女子商業高校・誠心高校・磐田北高校の各郷土研究部



調査の概要

I. 経過

調査は道路計画当初、向山第2号墳のみが路線内に入っていたが、その後バス・ストップの設置があり第1号墳も調査の対象となった。

発掘調査は第1次調査として第2号墳を昭和41年8月17日から8月26日まで、第2次調査として第1号墳を昭和42年7月22日から7月31日に分けて行った。

本墳は第2号墳が古墳築成に際して基盤に周溝とは性格を異にする輪郭壁を施したあとで盛土を行ったと思われることと、石室が架設されなかったものと思われることから調査は墳頂部で交わるセクション帯を残し全体を掘りさげる調査を行ったのであるが、墳頂部には国上地理図に示されている三角点285によって85cm下部まで擾乱されており、墳丘全体にわたり9箇所の標柱穴が認められ、古墳としての性格を失ったものであった。

副葬品としては墳丘封土中より鐵錐1本と若干の繩文土器片・弥生土器片が検出された。

以上のように、向山第1号墳の調査は主体部の存在が擾乱によってその機能を失った古墳であったことが指摘できよう。

II. 概要

A 地形

本墳の位置する地形は、西方に原野谷川、南方に逆川が存し、その間に形成された沖積地のほゞ中央部に南北2.3km・東西に300mほどの独立段丘を形成している。この段丘は通称岡津原と呼ばれ段丘上は比較的平坦地に恵まれている。現存する遺跡は、繩文文化遺跡1・弥生文化遺跡1・古墳文化遺跡16を数え、原野谷川の西岸に位置する和田岡原と共に考古学上貴重な地域である。

本墳はこの岡津原古墳群中最も南端東側にあり、隣接する第1号墳及び既に消滅した2・3基の古墳とともに一つの支群を形成している。

B 遺跡概要

立地、外形などの様相において本墳は他の古墳と異なるものでなく、墳形はいわゆる円墳と称せられるものである。外形からみた墳形は三角点(28.5)とその標柱等によって著しく原形をそこなわれている。

調査の結果より得た墳丘の規模は、断面観察によれば東西12.8m・南北11.5m・高さ1.15m内外の規模であったことが窺える。外部施設としての葺石・埴輪等の施設はなく、一般的に古墳の裾をめぐる周溝の施設も存在しなかった。

墳丘を形成する盛土は墳頂部において三角点杭によってはゞ2mの経で深さ85cmほどが完全に擾乱され、またその周囲9個所が標柱穴で擾乱されて盛土の観察すら満足できるものではなかった。しかし現存する部分のみで観察すると、基盤部においては築成時に基盤に手を加えず盛土を行っている。盛土を形成する土層は段丘を形成している黄褐色土層と礫を含む黄褐色土層、それに表土層であったと思われる褐色土層の三層によって交互段築状に盛土されたものと思われる。

前述したように、本墳の主体部は既に墳丘内には存在せず、埋葬施設としての石材・粘土等の検出も不能であった。

ここに若干の推定を加えるならば、本墳の埋葬施設は遠江地方において10数例発見されている上方・下方をコ字形に粘土で覆う施設か、あるいは、それに類似した施設ではないかと推定するものである。

このような状態における本墳の副葬品は墳丘全体を除去したのであるが、墳頂や西よりの表土層直下の擾乱層内から検出した鉄鎌1本と共に褐色土層内から検出した繩文土器・弥生土器の細片50片ほどであった。

以上のように、本墳は三角点の設置等の擾乱によって主体部が完全に失われたと考えざるを得ない結果となった。

C 出土遺物

本墳から検出された遺物は前項で記した如く褐色擾乱層より検出された鉄鎌1本と封土に混入していた繩文土器と弥生土器の細片のみであった。

鉄鎌 広峰腹扶長三角形式^(注1)に属するものであって、鎌長4.5cm・腹扶長3.2cmを測る大型鎌である。全体に錆化が甚だしいが鎌の一端に挟籠が一部残存している。

繩文土器 全体的に茶褐色または黒褐色を呈し、繊維を含んでいるが胎土は荒く、米粒大の礫を含んでいるもので器表面に条痕を有するものと篦状器具による縦位の刺突文が見られるもの。

胎土はかなり精選されていて黒褐色を呈し器表面に荒い条痕が見られるものがある。

前者は関東地方の茅山式土器に、また中部地方における柏原式土器に類似し、早期後葉に編年を求められる。後者は条痕糸の土器で水神平式土器にその特長を求めることができる。

弥生土器 全体に黄褐色か茶褐色を呈し、よく精選された胎土である。器表面には連続瓜形文・繩文・条痕を施したもので、その特長から標準土器を遠江嶺田式土器に求めることができる。

III. 考 察

第1次調査の第2号墳とともに若干の考察をすると、古墳の年代的序列を決定する足掛りとな

るべき副葬品の検出が第1号墳では鉄鏡と第2号墳では須恵器菱形土器片のみの乏しい結果、築成年代を決定づけるには困難であるが、外部的観察と得た資料をもとにすると、

- 立地的には段丘突端部に位置し、墳丘規模が10m～15mの小規模なもので、群集墳を形成していること。
- 内部主体が擾乱のため確認できなかったとは言え、石室用材がなんら発見されず築成時に石室を架設したとは思われないこと。
- 本墳検出の鉄鏡が中期末前後^(注2)に比定されること。
- 第2号墳検出の須恵器菱形土器片中、口縁部の造り、器面全体よりうける状態で須恵器編年の上からも比較的古い時期にその類例を求めることが可能のこと。

以上の観点から本墳を推察すると

1に対しては遠江において群集化する初期の段階を中期後葉に求める。

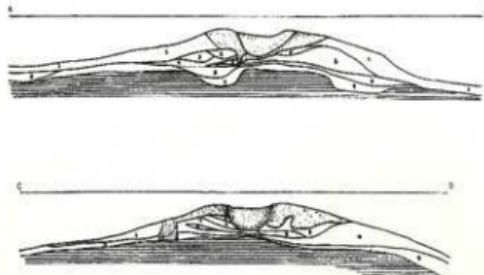
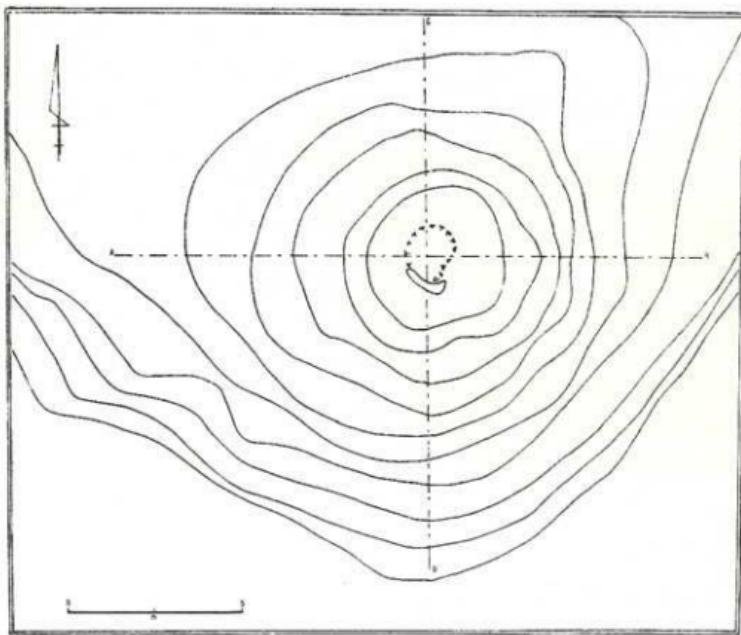
2に対しては石室を架設する初期の古墳が遠江において後期前葉後に考えられ、中期大型墳より石室を架設する後期に移行する間の過渡期的時期が考えられる。

副葬品の乏しさは、遠江において発見されつゝあるこの期の古墳と共通する点。

4の須恵器編年で前述の菱形土器の出現が第二型式以前であることを前提として考えると、遠江に横穴式石室が採用され、副葬される須恵器が第二型式以降^(注3)からと肯定されるならば第2号墳出土のそれを2の考察と併せ、敢えて時期を求めるならば、6世紀初頭に向山古墳群の築成を求めるものである。

註

- 後藤守一著「日本古代文化研究」河山書房 昭和17年。
- 註1。
- 磐田市鶴塚古墳（平野和男氏教示）磐田市大門大塚古墳等出土の須恵器が遠江において横穴式石室出土の初期の段階であり、いずれも第二型式後半のものとされる。



- 1 棕褐色土 层
- 2 黄褐色土 层
- 3 黄褐色粘土 层
- 4 黑色有机土 层
- 5 褐色有机土 层
- 6 黄褐色土 层
- 7 黑色土 层
- 8 黑色土 层
- 9 棕色有机土 层
- 10 棕褐色土 层

向山古墳(第1号) 墓丘圖

図版 1 向山古墳（第1号）の調査 その 1



A 古 墓 の 遠 景 (東方より)

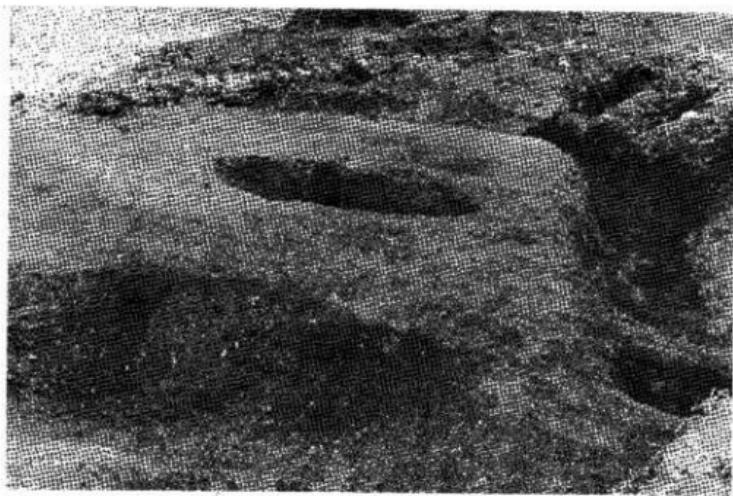


B 古 墓 の 遠 景 (西方より)

図版 2 向山古墳（第1号）の調査 その 2



A 墓丘断面図



B 溝状遺構

